

母親の養育態度と友人関係における過剰適応の関係 — 大学生サンプルにおける検討 —

久保 知也・中地 展生

問題

過剰適応がもたらす問題

小・中学生における長期欠席者数が年々増加し、2022年度では過去最多の460,648人となった(文部科学省, 2023)。長期欠席者の中には「不登校」と呼ばれる状態にある児童生徒が含まれており、予防などの対策が求められている。不登校について、文部科学省(2023)は、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者(ただし、「病気」や「経済的理由」、「新型コロナウイルスの感染回避」による者を除く)」と定義している。

小・中学生が不登校に陥る原因として、「無気力・不安」、「生活リズムの乱れ、あそび、非行」、「いじめを除く友人関係をめぐるトラブル」、「親子の関わり方」等が挙げられるが(文部科学省, 2023)、船津(2010)は、一見適応しているような所謂「よい子」であっても、急に不登校や心身症、非行などを起こすことが問題視されていること、その行動の背後に、実は子どもたちが過剰適応に陥っていた可能性が考えられていることを述べている。この過剰適応とは、環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行うことである(石津, 2006)。風間(2015)は、過剰適応を「自己への不安全感や自分らしさがないために、必要以上に自己抑制的な振舞いをしたり、他者からの期待や要求に応えようとする努力が行き過ぎている状態」と定義している。また、石津・安保(2008)は、過剰適応を「内的側面」、「外的側面」の2つの側面に分類している。それぞれの側面について、前者は過剰適応傾向の者が示す性格特徴、後者は個人が外的に適応していることを示すために取る行動や、外的適応を維持もしくは上昇させるとされている(石津・安保, 2008)。桑山(2003)は、心理的適応とも言われ、幸福感・満足感を経験し、心的状態が安定していることを意味する内的適応、社会的・文化的適応と言われ、個人が生きている社会的・文化的環境に対する適応を意味する外的適応、がいきすぎた状態として過剰適応を説明している。このように、過剰適応については2つの側面があることが想定されており、本研究においても、2つの側面から検討する。

このような過剰適応に関する研究について、例えば、山田(2010)は、大学生において、過剰適応者が見捨てられ抑うつを感じていることを明らかにしており、船津(2010)は、過剰適応得点の高低によって、ストレス反応や特性不安の得点に違いがみられ、ストレス状況に対する対処法が異なる

ことを明らかにしている。さらには、過剰適応について、大学生における調査から両親や友人、教師との関係ごとに違いが見られることが明らかにされている(風間・平石, 2018)など、近年においても過剰適応に関する研究は多く行われている。以上のことから、大学生を過剰適応という観点からみただけの場合、どのような状況にあるのかといった実態を明らかにするためにも、過剰適応に焦点を当てて研究していくことには意義があると考えられる。

養育態度と過剰適応との関連

過剰適応に影響する要因の一つとして、養育態度が挙げられる。養育態度とは、親が子どもを育てるにあたって、意図的あるいは無意図的にもつ方針(有馬, 1990)であり、子どもの発達等にさまざまな影響を及ぼすことが明らかにされている(藤岡・村山, 2019; 山下他, 2010)。山下他(2010)は子ども時代の両親の養育態度が、現在の親子関係や自尊心、生き方志向に関連があること、特に母親の養育態度が過保護でなかった方が、生き方志向や自尊心にプラスに影響することを明らかにしている。さらに、高富・桂田(2011)は、大学生の報告による親の養育態度において、受容得点、分離不安得点、適応援助得点で、女性の方が男性よりも有意に高かったことを明らかにしており、水本(2018)は、娘が捉える母親との関係は、他の組み合わせの親子関係と比較して信頼関係が高く、親密性が総じて高かったことを明らかにしている。小高(2015)は、青年の母への態度・行動について性差を検討し、母との情愛的絆の尺度等で女性の方が男性よりも得点が有意に高かったことを明らかにし、母親と娘は、息子と比較し、情緒的な結びつきが強いと考えられると述べている。これらのことから、母親の養育態度には性差が、さらには養育態度の影響の及ぼし方については性別で異なる影響がみられるのではないだろうか。

過剰適応と養育態度との関連について、石津・安保(2009)は過剰適応に影響を与える要因に母親の養育態度の「温かさ」があることを明らかにしている。任・林(2020)は男女ともに母親の情愛的な養育態度が「外的側面の過剰」に正の影響を及ぼすこと、母親の過保護な養育態度が「外的適応の過剰」、「内的適応の低下」に正の影響を及ぼすことを示している。さらに、「内的適応の低下」に与える影響において、母親の情愛的な養育態度が女子のみに負の影響が示されたことも明らかにしている(任・林, 2020)。以上から、養育態度、特に母親の養育態度が過剰適応に影響を及ぼすことが考えられ、情愛的な養育態度は過剰適応に負の影響を、過保護な養育態度は過剰適応に正の影響を及ぼす

ことが考えられる。しかし、任・林(2020)において、大学生において母親の養育態度が親に対する過剰適応に影響を及ぼすことは明らかにされているものの、家庭外での過剰適応に及ぼす影響については十分に明らかにされていない。よって、本研究では、家庭内の要因である母親の養育態度が家庭外での過剰適応に及ぼす影響にはどのような特徴があるのかを検討する。

大学生の友人関係

家庭外での過剰適応が生じる場面として、友人関係が考えられる。特に、大学生において、友人が重要な他者であるという研究は多くなされている。例えば、嶋(1991)は、大学生におけるサポートとして、同性の親友と恋人が二大サポート源であり、親友以外の同性の友人も比較的重要性をもつことを明らかにしている。菊島(2002)は、大学生にとって「友人ストレス」がストレス反応を引き起こしやすい深刻なストレスの一つであることを明らかにしている。このように、大学生にとって友人との関係は重要であるがゆえに、その関係性によってはストレス反応が高くなるというような不適応状態に陥る可能性も十分に考えられる。また、小林(2011)は、大学生を対象に、現在の友人関係のあり方を説明する際、比較的説明力が高かったのが母親の養育態度を用いたモデルであることを示しているが、友人関係を過剰適応の側面から捉え、母親の養育態度との関連を検討している研究は見当たらない。したがって、大学生にとって重要である友人関係の中で過剰適応的な適応方略をとることで、友人関係を円滑に進めていることも十分に考えられ、さらには母親の養育態度が友人関係における過剰適応にどのような影響を与えるのか検討することには意義があると考えられる。

本研究の目的

本研究では、大学生にとって重要な他者である友人に焦点を当てて、青年期前期までの母親の養育態度の感じ方と友人関係における過剰適応の間にはどのような関係があるのかを性差の視点から検討し、今後、過剰適応を示す前、さらには過剰適応状態にある者に対してどのような介入・援助が有効であるかの研究に役立てることを目的とする。なお、友人関係における過剰適応については、任・林(2020)の研究と同様、石津(2006)が作成した青年期前期用過剰適応尺度を使用して、「外的側面の過剰適応(以下、外的側面)」と「内的側面の過剰適応(以下、内的側面)」の2側面から検討する。また、母親の養育態度についても、任・林(2020)の研究に基づき、小川(1991)のPBI(Parental Bonding Instrument)日本版を使用して、「情愛」、「過保護」の2側面から検討する。なお、本研究の仮説は以下の通りである。

1) 女性の方が男性よりも母親の養育態度を愛情深く、過保護でなかったと感じているだろう。

2) 母親の情愛的な養育態度は過剰適応に負の影響を与えるだろう。

3) 母親の過保護的な養育態度は過剰適応に正の影響を与えるだろう。

方法

調査対象者

調査対象者は関西圏内の大学で心理学を専攻する大学生215名(男性 = 57名, 女性 = 151名, 性別未回答者 = 7名, 平均年齢 = 19.59歳, $SD = 1.13$)であった。

調査時期

2022年11月であった。

手続き

大学の講義時間の一部を利用し、Googleフォームを用いた集団法による質問紙調査を実施した。本調査についての説明が記載された調査参加用紙の配付を行い、研究の参加に同意した調査参加者には、調査参加用紙に添付されたQRコード及びURLからGoogleフォームでのWeb調査に回答してもらうよう指示した。

質問紙の構成

フェイスシート 参加者の属性として、性別、年齢、学年を尋ねた。

母親の養育態度についての項目 母親の養育態度を測定するために、小川(1991)のPBI日本版を使用した。この尺度は、回答者が16歳までの親の養育態度を評価するものであり、「情愛(13項目/項目例:暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた)」、「過保護(12項目/項目例:私自身に決定を下させた)」の2因子、全25項目から構成されていた。「情愛」や「過保護」については点数が高ければ高いほど、愛情深い養育態度であった、過保護な養育態度であった、と当時を評価していたことになる。本研究では、青年期前期までの母親の養育態度を測定するため、教示文を「あなたが中学卒業までの、あなたの母親について、覚えている通りにもっとも適当と思えるものを選択してください。」と変更し、また項目中にある『親』を『母親』に変更して母親の養育態度を尋ねた。回答については、「まったく違う」(0点)～「非常にそうだ」(3点)の4件法で回答してもらった。

友人関係における過剰適応についての項目 友人関係における過剰適応を測定するために、石津(2006)の青年期前期用過剰適応尺度を使用した。この尺度は、過剰適応を2側面から評価するものである。「他者配慮(8項目/項目例:相手がどんな気持ちか考えることが多い)」、「期待に沿う努力(7項目/項目例:期待にこたえないと、しかられそうで心配になる)」、「人からよく思われたい欲求(5項目/項目例:相手にきらわれないよう行動する)」の3下位因子、計20項目で構成される「外的側面」と、「自己抑制(7項目/項目例:自分の気持ちをおさえてしまうほうだ)」、「自己不全感(6項目/項目例:自分のあまりよくないところばかり気になる)」の2下位因子、計13項目で構成される「内的側面」の2因子全33項目で構成されていた。回答については、「まったくあてはまらな

い」(1点)~「とてもあてはまる」(5点)までの5件法で回答してもらった。本研究では、友人関係における過剰適応を測定するため、任・林(2020)の先行研究を援用する形で、各項目にある『相手』、『人』、『他者』を『友人』に変更して使用した。

努力の最小限化を検出する項目 三浦・小林(2018)を参考に、Directed Questions Scale (以降、DQS)1項目を過剰適応尺度中に含めた(項目例:この項目には2を回答してください)。DQSとは、「尺度項目を精読しない努力の最小限化を検出するための方法で、多数の項目からなるリッカート尺度に、選択すべき選択肢を指示する項目を含め、指示通りの選択がなされたかどうかによって判定する」方法(三浦・小林, 2018)である。DQSは青年期前期用過剰適応尺度の21問目を含めた。DQSにて教示と異なる回答をした者については、違反回答者として分析から除外した。

分析方法

本研究のデータ分析は、統計解析ソフトIBM SPSS statistics28を使用した。

倫理的配慮

研究における倫理についての説明を調査参加用紙やGoogleフォームの文面に記載し、加えて口頭でも、個人情報やプライバシーの保護などについて説明した。その後、説明に同意した者のみ調査への回答を行い、Googleフォームへの回答をもって調査への同意を得たものとした。

結果

はじめに、DQSに違反する回答をした4名を除外した。また、性差による検討を実施するため、性別について「回答しない」を回答した7名を除外した。以上の手続きを行い、欠損値のなかった者を有効回答者として以降の分析に用いた。有効回答者数は204名(男性55名、女性149名、平均年齢 = 19.60歳、 $SD = 1.09$)であり、有効回答率は94.88%であった。

各尺度の記述統計

本研究では、各尺度について改めて因子分析を行うことはせず、先行研究と同様の因子構造であるものとして分析を行った。各尺度の信頼性係数(Cronbachの α 係数)を算出したところ、養育態度尺度の「情愛」は $\alpha = .87$ 、「過保護」は $\alpha = .83$ 、過剰適応尺度の「外的側面」は $\alpha = .91$ 、「内的側面」は $\alpha = .91$ であった。本研究で用いた尺度は、概ね適切な信頼性をもつことが確認された。なお、各尺度の平均値、標準偏差および、各因子の α 係数についてはTable 1に示す。

Table 1
各尺度の記述統計

因子名	合計		得点範囲	α 係数
	Mean	SD		
情愛	25.91	7.86	0-36	.93
過保護	12.04	6.22	0-39	.82
外的側面	70.47	14.57	20-100	.91
内的側面	43.96	11.12	13-65	.91

養育態度得点における性差による比較

養育態度得点において性差がみられるかどうかを検討するために、性別を独立変数、養育態度尺度の2因子を従属変数とする対応のない t 検定を行った(Table 2)。その結果、「情愛」、「過保護」の2因子で有意差が認められ($t(202) = 1.98, p = .049, d = .31$; $t(202) = 2.44, p = .016, d = .38$)、「情愛」では女性が男性より有意に高く、「過保護」では男性が女性より有意に高いことが明らかになった。

Table 2
養育態度得点の性差

因子名	男性	女性	t 値	Cohen's d
	($n = 55$)	($n = 149$)		
	Mean	Mean		
	(SD)	(SD)		
情愛	24.13	26.56	1.98 *	.31
	(8.06)	(7.72)		
過保護	13.76	11.40	2.44 *	.38
	(6.76)	(5.90)		

注) * $p < .05$

性別ごとの各因子間における相関

多重共線性などの確認のために、以降の分析に使用する予定の変数について相関係数の算出を行った(Table 3)。分析の結果、得られた値は概ね以降の分析として用いるのに問題ない範囲であると考えられた。

Table 3
各因子における相関分析の結果

	1	2	3	4	5
1 年齢	—	.03	.09	.00	-.03
2 情愛	.06	—	-.46 ***	-.15	-.25 **
3 過保護	.07	-.57 ***	—	.13	.22 **
4 外的側面	.13	.04	.28 *	—	.56 ***
5 内的側面	-.19	-.20	.39 **	.49 ***	—

注1) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注2) 左下: 男性; 右上: 女性

母親の養育態度の感じ方が友人関係における過剰適応に与える影響の検討

本研究では、友人関係における過剰適応について、「外的側面」、「内的側面」に分け、性別ごとに分析を行った。**男性サンプルにおける重回帰分析** 母親の養育態度が過

剰適応の「外的側面」に与える影響について検討するために目的変数を「外的側面」、説明変数を「情愛」、「過保護」の2因子とする強制投入法による重回帰分析を行った(Table 4)。その結果、養育態度の「過保護」が有意な正の影響を与えることが示された($\beta = .45, p < .01$)。母親の養育態度が過剰適応の「内的側面」に与える影響について検討するために目的変数を「内的側面」、説明変数を「情愛」、「過保護」の2因子とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、養育態度の「過保護」が有意な正の影響を与えることが示された($\beta = .41, p < .05$)。

Table 4
男性における重回帰分析の結果

説明変数	外的側面	内的側面
	β	β
情愛	.30	.03
過保護	.45 **	.41 *
Adj. R^2	.11 *	.12 *

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

女性サンプルにおける重回帰分析 母親の養育態度が過剰適応の「外的側面」に与える影響について検討するために目的変数を「外的側面」、説明変数を「情愛」、「過保護」の2因子とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、有意な影響はみられなかった(Table 5)。母親の養育態度が過剰適応の「内的側面」に与える影響について検討するために目的変数を「内的側面」、説明変数を「情愛」、「過保護」の2因子とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、養育態度の「情愛」が有意な負の影響を与えることが示された($\beta = -.18, p < .05$)。

Table 5
女性における重回帰分析の結果

説明変数	外的側面	内的側面
	β	β
情愛	-.11	-.18 *
過保護	.08	.14
Adj. R^2	.01	.06 **

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

考察

本研究では、大学生において青年期前期までの母親の養育態度の感じ方について性差があるのかを検討し、また母親の養育態度の感じ方が友人関係における過剰適応に及ぼす影響について性別の視点から検討した。

母親の養育態度の感じ方の性差

母親の養育態度の感じ方について性差がみられるかを検討するために、独立変数を性別、従属変数を養育態度得点とする対応のないt検定を行ったところ、「情愛」、「過保

護」因子ともに有意差が認められ(「情愛」:女性>男性;「過保護」:男性>女性)、仮説1は支持された。小高(2015)は、母親と娘は、息子と比較し、情緒的な結びつきが強いと考えられると述べている。したがって、母―息子と母―娘の母子関係には違いがみられることが考えられ、情緒的な結びつきが強いと考えられる女性の方が母親の愛情を受けやすいのではないだろうか。さらには、こうした関係性の違いが、無意識的に子どもの養育態度の感じ方や母親の養育的なかかわりにも影響を及ぼしている可能性が考えられる。**男性における母親の養育態度の感じ方と友人関係における過剰適応との関連**

重回帰分析の結果から、母親の過保護な養育態度が友人関係における過剰適応の「外的側面」および「内的側面」に正の影響を与えることが示され、男性において仮説2は支持されず、仮説3は支持された。男性がかつての母親の養育態度を過保護だったと感じているほど、現在の友人関係において自分の欲求や感情を抑圧し、友人の期待や要求に応えようと振舞っていることが示唆された。宮代・岩岡(2021)は、母親がより統制的であったと感じている大学生ほど自尊感情がより低いこと、小林(2011)は、母親の統制的な養育態度が自己否定感を若干高めてしまう効果を有することを明らかにしている。したがって、過保護な養育態度によって自主性やアイデンティティの獲得が阻害されることで、自己不全感を高めるというような内的側面の過剰適応を強めていると考えられる。さらに、梶本・菅(2020)は、親から子への愛情が強く表明されていたり、過保護な傾向が強いほど、友人関係において友人に気を遣うことが多いことを示しており、本研究の結果は、母親の過保護な養育態度が親に対する「外的適応の過剰」、「内的適応の低下」に正の影響を及ぼすという先行研究(任・林, 2020)と一致している。そのことから、母親の過保護な養育態度が与える影響の大きさが窺え、友人関係においても同様の過剰適応方略が身につけてしまっていることが考えられた。また、石津・安保(2009)は、少なくとも「内的側面」が「外的側面」を生起させやすいことを示していることから、過保護な養育態度が内的側面の過剰適応を高め、その結果、過剰適応の外的側面が高められているというようなプロセスに陥っている可能性も考えられる。

女性における母親の養育態度の感じ方と友人関係における過剰適応との関連

重回帰分析の結果から、母親の情愛的な養育態度が友人関係における過剰適応の「内的側面」に負の影響を与えることが示され、女性において仮説2は一部支持され、仮説3は支持されなかった。これは、任・林(2020)の母親の情愛的な養育態度が、親に対する過剰適応の「内的適応の低下」に負の影響を与えるという研究結果と一致していた。女性がかつての母親の養育態度を愛情深いものだったと感じているほど、現在の友人関係において自分の欲求や感情

に正直にいられるということが示唆された。石津・安保(2009)は、養育態度の温かさが友人適応にやや弱めの正の影響を与えていることを明らかにしている。また、宮代・岩岡(2021)は、母親が自分を受け入れていたと感じている人ほど自尊感情がより高いことを明らかにしている。したがって、母親の情愛的な養育態度によって受容されていると感じられることで、あるがままの自分を受け入れられるのではないだろうか。このことから、実際に情愛的だと感じられやすい養育態度はどういうものなのか質的な研究を行っていくことも必要だと考えられる。

まとめ

本研究では、男性の方が過保護だと感じやすく、男性においては、その過保護な養育態度が友人関係における過剰適応にとって重要な因子となり、友人関係における過剰適応を促進させるという特徴がみられた。また、女性の方が情愛的だと感じやすく、女性においては、その情愛的な養育態度が友人関係における過剰適応にとって重要な因子となり、友人関係における内的側面の過剰適応を抑制させるという特徴がみられた。以上から、母親の養育態度が友人関係における過剰適応の内的側面に与える影響については、親に対するものと同じ効果がみられた(任・林, 2020)。さらには、本研究では中学卒業までの養育態度を対象としたが、現在の過剰適応の内的側面にも影響を与えていることから、その影響は大きく長期的なものであることが考えられる。今後、家庭内外にかかわらない過剰適応の内的側面を促進・抑制する要因として養育態度に着目し、早期の介入が必要になるのではないだろうか。こうした養育態度へのアプローチの一つとして、親に対する子育て講座やペアレントトレーニングなどが考えられる。

一方で、任・林(2020)は、親に対する過剰適応において、男女ともに母親の情愛的な養育態度が「外的側面の過剰」に正の影響を及ぼすことを明らかにしているが、本研究ではそのような結果は得られなかった。このことについて、過剰適応の外的側面が誰に対してのものなのかという対象の違いが、異なる結果となった要因の1つとして考えられる。親に対する過剰適応では、親の養育態度に直接呼応していく形となり、より過剰適応的に振舞ってしまうのではないだろうか。一方、友人関係における過剰適応は、友人という第三者への適応事象である。そのため、養育態度が家庭内での過剰適応の外的側面に与える影響に比べると、家庭外である友人関係における外的側面の過剰適応にはそれほど影響しなかったことが考えられる。今後は、友人関係における外的側面の過剰適応を促進、抑制する他の要因についても研究していく必要があるだろう。

今後の課題と展望

本研究の課題として、重回帰分析におけるモデルの説明率が低いことが挙げられる。養育態度という観点からみると、任・林(2020)は母親の養育態度だけでなく、父親の養育

態度が親に対する過剰適応に及ぼす影響についても明らかにしており、小林(2011)は、母親の養育態度と父親の養育態度の一部に相関がみられることを明らかにしていることから、父親の養育態度も併せて検討することで父親の要因や両親の養育態度を交互作用の点から検討することができると考えられる。また、自身のパーソナリティやソーシャルスキルなど養育態度以外の要因が現在の友人関係に影響することが考えられるため、さまざまな要因から包括的に現在の友人関係を検討していくことが求められる。

本研究の展望として、大学生における現在の親の養育態度や親との関係がどのような影響を及ぼしているのかを併せて検討することも視野に入れることができる。親が認識する養育的かかわりと子どもが感じる親の養育態度の認識にはギャップがあることや、親子関係の変化が過去の養育態度の感じ方に影響を及ぼしている可能性も考えられる。ゆえに、こうした視点から検討することで、どのようなメカニズムで現在の過剰適応状態にあるのかをより詳細にモデル化することができると考えられる。さらには、過剰適応状態にある大学生に対して、SSTなどの心理教育を実施し、適切な自己表現やソーシャルスキルを身につけることができるような介入を行っていくことも必要であると考えられる。

付記

本論文は、第一著者の2022年度帝塚山大学心理学部卒業論文の一部に加筆修正したものである。また、本研究の一部は、日本人間性心理学会第42回大会で発表された。また、論文作成にあたり、データ処理や分析についてご指導いただいた亀田凌雅氏(帝塚山大学大学院心理科学研究科)に、深く感謝いたします。

引用文献

- 有馬 道久 (1990). 養育態度 小林 利宣(編) 教育・臨床心理学中辞典(p. 419) 北大路書房
- 藤岡 瑛・村山 恭朗 (2019). 大学生のレジリエンスと両親の養育態度の関連 神戸学院大学心理学研究, 2, 31-36.
- 船津 愛 (2010). 青年期過剰適応に関する一考察—一尺度の再検討とストレスコーピングとの関連— 日本青年心理学会大会発表論文集, 18, 30-33.
- 石津 憲一郎 (2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 137.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2009). 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究—個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から— 教育心理学研究, 57, 442-453.
- 梶本 千潤・菅 千索 (2020). 母親の養育態度と大学生の「友人関係」「社会的スキル」「他者意識」「対人信頼感」の関連について 和歌山大学教育学部紀要. 教育科学, 70, 117-123.

- 風間 淳希 (2015). 大学生における過剰適応と抑うつとの関連 — 自他の認識を背景要因とした新たな過剰適応の構造を仮定して — 青年心理学研究, 27, 23-38.
- 風間 淳希・平石 賢二 (2018). 青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討 — 関係特定性過剰適応尺度 (OAS-RS)の開発を通して — 青年心理学研究, 30, 1-23.
- 菊島 勝也 (2002). 大学生用ストレス尺度の作成 — ストレス反応, ソーシャルサポートとの関係から — 愛知教育大学研究報告. 教育科学, 51, 79-84.
- 小林 真 (2011). 中学校時代の両親の養育態度が青年期の友人関係のあり方に及ぼす影響 — 自己概念を媒介変数として — とやま発達福祉学年報, 2, 21-28.
- 小高 恵 (2015). 大学生の心理社会的適応に与える母子関係の影響について 太成学院大学紀要, 17, 39-49.
- 桑山 久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察: 欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2018). オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響 行動計量学, 45, 1-11.
- 宮代 こずゑ・岩岡 紗希 (2021). 大学生の自尊感情と親の養育態度の関連 宇都宮大学共同教育学部研究紀要, 71, 13-24.
- 水本 深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係 — 精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差 — 教育心理学研究, 66, 111-126.
- 文部科学省 (2023). 令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2023年10月7日)
- 任 玉洁・林 雅子 (2020). 親の養育態度が大学生の過剰適応に及ぼす影響 — 性差の視点から パーソナリティ研究, 29, 23-26.
- 小川 雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, 6, 1193-1201.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 高富 莉那・桂田 恵美子 (2011). 大学生の心理的自立と親の養育態度の関連 臨床教育心理学研究, 37, 27-32.
- 山田 有希子 (2010). 青年期における過剰適応と見捨てられ抑うつとの関連 九州大学心理学研究, 11, 165-175.
- 山下 芙実子・石 暁玲・林田 恵美子 (2010). 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連 — 過保護という養育態度の検討 — 臨床教育心理学研究, 36, 21-26.

Relationship Between the Child-Rearing Attitudes of Mothers and Overadaption to Friends of University Students

Tomonari KUBO and Nobuo NAKAJI

Abstract

This study examined the relationship between the overadaption of university students to friends and the child-rearing attitudes of mothers. The study analyzed data on the responses of 215 university students who responded to a web-based survey, of which 204 responses were valid. The results indicated that men, compared to women, rated the child-rearing attitudes of their mothers as more overprotective, which enhanced the external and internal aspects of overadaption. Meanwhile, women, compared with men, rated the child-rearing attitudes of their mothers as more affectionate, and suggested that this attitude weakened the internal aspects of overadaption. The results indicate that mothers' child-rearing attitudes influence the out-of-home adjustment of university students in the form of overadaption to friends, and the manner in which these influences vary by gender.

Keywords: overadaption, child-rearing attitudes, friendship, gender differences, university students